跡見学園女子大学紀要　第34号　(2001年３月15日)

プラハ言語学サークルの第４，５，６，７，８テーゼ

The Fourth, Fifth, Sixth, Seventh and Eighth of the Ten Theses Presented by the Prague Linguistic Circle

飯　島　　周

Summary

This paper belongs to the series of my papers examining the ten theses the Prague Linguistic Circle presented to the First Congress of Slavic philologists held in Prague in 1929.

All the five theses translated here are related to the philological problems of Slavic languages:

The fourth thesis deals with those of Old Church Slavic to find out its right position or status;

The fifth　the importance of the phonetic and phonological transcription;

The sixth　linguistic geography, its principles and its relation to ethnographic geography;

The seventh　problems of an all-Slavic linguistic atlas;

The eighth　problems of the method of Slavic lexicography.

Key words. linguistics, language, functionalism, Prague School

〈はじめに〉

本小論は，飯島（1987），（1988），（1993），（2000）に続くもので，いわゆるプラハ言語学派の理論的出発点となったテーゼの内容を，日本語への翻訳を通じて再吟味しようとする試みの一部である。そこで，本稿作成の手続きは前回までと同じであり，それらを含めて御検討いただければ幸いである。

なお，プラハ学派の歴史については，本稿末尾の〈おわりに〉で簡単に触れておく。

〔注〕の中で「原語」とはVachek（1970ａ）の用語，「仏訳」はBrun（1929仏訳），英訳はVachek（1983英訳），「独訳」はScharnhorst（1976独訳）である。（なお，最近の邦訳として，Brun（1929）を原本とする山口巌「プラーグ学派のテーゼ」『パロールの復権　ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』ゆまに書房 1999 pp. 351―381がある。）

〈プラハ言語学サークルのテーゼ　第４項〉

教会スラヴ語の現実的諸問題

ａ）古(代)スラヴ語[1]という用語によって，次のような言語，すなわち，伝道師たち[2]とその弟子たちが儀式上の必要のために用い，その後10世紀から12世紀まで，あらゆるスラヴ人たちがスラヴ風の儀式に用いた標準文語[3]，を指すものだと理解するならば，方法論的な理由で，この言語が歴史的なスラヴ諸語の一つだと単純に認識されて，歴史的方言学の観点から説明し得ると認めることはできない。

最初から地方的な必要のために限定されたのではなく，ギリシアの標準文語的伝統に支えられ，その後スラヴの“コイネー”[4]の役割を持つようになったその言語の中には，すでにアプリオリに，人工的・混合的で様式化された諸要素があるものと前提しなければならない。それゆえ，古(代)スラヴ語の発展を，諸標準文語の歴史を支配する諸原理に基いて解釈する必要がある。

ｂ）10世紀から12世紀までの古(代)スラヴ語の文献記録を検討すると，それらが古(代)スラヴ語のいくつかの地方的異体[5]によって構成されていることが示される。古(代)スラヴ語を標準文語とする観点から正当でないのは，これらの異体の一つだけを正当な古(代)スラヴ語として認めること，および他の異体は単にそれを逸脱したものとみなして無視すること，である。古(代)スラヴ語の地方的異体（古(代)スラヴ語の文章語諸方言）は，10世紀から12世紀初頭までに書記たちが課した，諸規範の分析によって発見されるべきである；これらの文章語諸方言は，生きたスラヴ語の諸方言から注意深く区別しなければならない。生きた方言は，誤ちや，書記が受け入れた規範からのたまたまの逸脱によって，文献記録の中に侵入している。

古(代)スラヴ語の歴史の枠内で，南スラヴ語の諸変異体と，それから生じたロシア語の変異体およびチェコ語の変異体の残存部分，さらにチェコ語の最古の教会文献記録中のそれらの痕跡の，注意深い研究が要請される。

ｃ）古(代)スラヴ語の起源と成立の判定のために，また同様に，生きたスラヴ諸語の歴史のために，当然ながら重要な問題は，スラヴの文章語創造の際に，伝導師たちが基礎として採用した，その生きたスラヴ語を判定することである。この方言は，伝承されたスラヴ文章語諸方言のいずれからも，直接に抽出することができない：その判定のためには，古(代)スラヴ語の文章語諸方言の歴史的比較分析，および古(代)スラヴ語の両種の文字[6]の分析を利用することが必要である；さらに，この両種アルファベット文字についての最古の資料の比較分析は，そのアルファベット文字の本来の構成と，それらの音価を解明するのに役立つ。

d）12世紀のさまざまな変異体における古(代)スラヴ語のその後の運命の研究に際しては，個別の諸言語の内部においてその当時までに起った根本的な音声変化が，規則としてその中に取り入れられたので，“中(期)教会スラヴ語”[7]という名称を用いる方が，より適切である。

e）非常に緊急でありながらこれまで完全に閑却されているスラヴ学の課題は，現代までの教会スラヴ語の歴史の科学的研究である。

同様に，非常に緊急であり，方法論的に重要なスラヴ言語学の問題は，スラヴの諸民族標準文語内の（特にロシア語内の）教会スラヴ語の層[8]の歴史，およびそれらの言語内の他の諸層とこの層との相互関係の研究である。スラヴ諸標準文語における教会スラヴ語の諸要素は，さまざまな時代におけるそれらの機能の観点から研究されるべきであり，その際にはその標準文語に課せられた要請に従って，それらの価値の問題を解決することが必要である。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ　第5項〉

スラヴ諸語における音声学的および音韻論的転写[9]の諸問題

すべてのスラヴ語のために，音声学的転写の諸原理，すなわち個別諸言語の音声学的組織の実現のために使用される多種多様な音声を再生することを目的として，いかなる文字を用いるべきかの諸原理を統一する必要がある。

スラヴ諸語の共時的および通時的研究，特にスラヴ方言学の便宜の点で同様に重要な課題は，音韻論的転写の諸原理，すなわちスラヴ諸語の音韻論的組織の再生のために，いかなる文字を用いるべきかの諸原理を作り出すことである。

同様に，音声学的なものと音韻論的なものを統合する転写の諸原理を規定することが必要である。

標準化された音韻論的転写が不十分なことは，スラヴ諸語の音韻論的性格についての研究を困難にしている。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ　第6項〉

言語地理学の諸原理，スラヴ領域における民族地理学へのその適用と関連性

a）個別的諸言語現象[10]の空間的（又は時間的）境界を規定することは言語地理学（又は言語史）の必要な作業手段であるが，この作業手段を理論の自足的な目的としてはならない。

諸言語現象の空間的広がりを，個別的な等語線の無秩序な状態と考えることはできない。等語

線の間の相互比較が示すのは，いくつかの等語線が束として結合すること，すなわち言語的新現象グループのひろがりの焦点，およびこの広がりの周縁（又は周辺）地帯を規定できることである。

相互に関係する等語線の研究が示すのは，どのような言語現象が規則的結合の点で必然的なのか，ということである。

最終的に，等語線の比較は，言語地理学の基本的な問題にとっての，すなわち言語の科学的な地域分け，つまり最も成果ある分割原理による言語区分にとっての前提である。

b）言語体系の諸現象に限定するならば，個々に分離される等語線も，実際には虚構であると言える。なぜなら，外面的には同一の諸現象も，二つの異なる体系に属するなら，機能的には異質であり得るから。（たとえば見かけ上は同一である *i* は，ウクライナの異なる諸方言では異なる音韻論的効果を持つ：*i* < 0 の前で子音が軟音化[11]する場合は，*i* と *ï* は同一音素[12]の異音である；軟音化しない場合には，*i* と *ï* は二つの異なる音素である）

c）言語の歴史において，異質の現象の発展の比較が認められるように，諸言語現象の空間的広がりも，他の地理的等値線[13]と有効に比較され得る。それは，先ず人文地理学の等値線（経済的・政治的地理学の諸事実の境界と，物質的・精神的文化の諸現象の広がりの境界と）の間で，次いで自然地理学の等値線（土壌，フローラ，湿度や温度の等値線と，さらに地形学の諸事実と）の間でなされる。

その際に，あれこれの地理学的な特別な条件を無視してはならない。それゆえ，たとえばヨーロッパの諸条件の中では非常に実り豊かである，言語地理学と地形学との比較は，東スラヴの世界では気象的な等値線との比較よりも，明らかに小さな役割しか持っていない。等語線と人文地理学の等値線との比較は，共時的な観点からも通時的な観点からも，（歴史地理学や考古学などの資料との比較）同様に可能であるが，この両者の観点を混同してはならない。

異質な諸体系の比較は，比較される体系の等値性に配慮しない限り，有効ではあり得ない：それらの間に機械的な因果関係のカテゴリーを割り込ませたり，一方の体系の現象を他方の体系の現象から演繹したりするなら，これらの体系の総合グループ化をゆがめ，科学的な総合と平板な一方的判断とを取り違えてしまうであろう。

d）言語学的又は民族学的諸事実を地図化する際には，これらの事実の広がりが，言語的又は民族的な起源の親近性と一致しないこと，それがしばしば，より広範囲な地域を占めることに注意する必要がある。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ　第７項〉

全スラヴ言語地図，特に語彙地図の諸問題

スラヴ諸語は非常に近しいので，隣接する二つのスラヴ語の間の相違は，ある言語の，たとえばイタリア語の，隣接する二つの方言の間の相違よりも小さいことがしばしばである。地理的には，スラヴ諸語はほとんどすべて互いに接し合っている。南スラヴのグループと北スラヴのグループの間には地理的な結合はないが，それらのグループの各言語は，それ自体で途切れのない地理的総体となっている；その一方はヴェニスからトラキアまで，他方はシュマヴァ[14]から太平洋まで連続する。

このような諸条件は，それだけでも全スラヴ言語地図についての考察を招く；このような地図が必要であることは疑いもない。語源比較的なスラヴ語辞書の研究は，個々の単語が分布する境界の正確な決定なしには不可能である。Miklosch の辞書[15]，さらにBernekerの辞書[16]の中でも，それぞれ，当該の原スラヴ語の対応形があるスラヴ諸語のすべてを列挙しているが，これらの資料からは，当該の単語の広がりについての正確な観念を得ることができない。なぜなら，現実にはそのような広がりの境界は常に重複しており，辞書の中にはそれが示されていないからである。全スラヴの枠内で等語彙素線[17]を正確に規定することは，すべてのスラヴ語の歴史に対して，新しい眺望を開くことができる。

このような全スラヴ言語地図を実際に実現させることに関しては，次のことに注目する必要がある。すなわち，全スラヴ言語地図の実現の方が，個別スラヴ語の言語地図の場合よりも容易なのである；つまり，全スラヴ言語地図の作成のためには，それぞれのスラヴ地域において，ある特定のスラヴ地域の特別な地図の作成のために訪問する必要がある場所の数よりも，ずっと少数の地点を廻ればよいし，同時に言語についての質問のアンケート項目数も，前者の場合の方が後者の場合の方よりはるかに少ないであろう。

実際的に，その作業は次のような方法で組織できる：全スラヴのアカデミーのすべてが，全スラヴ言語地図作成のために，適切な委員会を選定する。科学アカデミーを持たないスラヴ諸民族の場合にも，同様に適切な学会がこの仕事を行なうであろう。これらの委員会すべての代表者が，次のすべての項目に同意するために会合する：ａ）資料収集予定の諸地点の密度と配置（これらのネット地点の網の目が，どこでもほぼ一定の密度であるようにすることが重要であり，その際，もちろんそれぞれの場所の条件の相違に注意する必要がある）；ｂ）統一的音声転写；ｃ）アンケートの質問項目，すなわちどのような単語が捕捉されるべきか。このようなアカデミー顧問委員会[18]が作成したプログラムは，すべてのアカデミーによって受け入れられ，その達成はそれぞれのアカデミーに委ねられる。そこで，該当するスラヴ民族のそれぞれの地域における，上述の

プログラムに従っての方言資料の収集のための財政措置と組織作りは，該当するアカデミーの責任となる。非スラヴ諸国におけるスラヴ少数民族については，上述のアカデミー顧問委員会が，該当諸国のアカデミーと連絡を取り，このプログラムに従って，それらのスラヴ少数民族の言語地理学的研究を組織しなければならない。

最終的に，全スラヴ言語地図の刊行は，スラヴ諸国すべてのアカデミーによって与えられる資金援助と，上述のアカデミー顧問委員会が任命する特別委員会の編集により実行されるであろう。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ　第８項〉

スラヴ語の語彙研究方法の諸問題

個別的な単語の起源およびそれらの意味変化を研究することは，一般的な心理と文化史にとって必要であるように，狭義の意味の言語学にとっても必要である。ただ，このような研究の範囲だけに，語彙論，すなわち語彙の科学を限定することはできない：なぜなら，語彙とは単に個別的な単語の大量な集積であるのみならず，諸単語の複雑な体系で，その内部ではすべての単語が相互に関係を持ち，相互に他と対立しているからである。

単語の意味は，その語彙内の他の諸単語との関係，すなわち与えられた語彙体系内のその位置で決定される：語彙体系内でその単語が占める位置を決定することは，ただこの体系の構造を知らなければ不可能である。このような研究に対しては，特別な考慮を向ける必要がある。なぜなら，語彙体系の構成要素としての単語については，現代に至るまでほとんど何も研究されていなかったし，これらの体系の構造も明らかにされなかったからである。多くの言語学者は，語彙とは――秩序立った体系を余儀なくされている形態論とは異なり――混沌（カオス）の状態で，ただ単語をアルファベット順に並べて，純粋に外部的に整理することしかできないものだ，と受け取っている。

これは明らかに誤りである。もちろん，語彙体系は形態論よりずっと複雑で内容量も多いから，言語学者は，形態論の体系を構成できるような明確さと解りやすさで語彙体系を構成することに決して成功しないであろう。しかしながら，個別の単語が語彙意識において[19]相互に対立的であり，しかも相互に関係しているなら，それらの単語は形態論の体系と形式的に類似する体系を形成していることになり，言語学者にとってそれらの体系を研究することが必要である。これまでほとんど触れられなかったこの領域において，言語学者を待ちうけているのは，単に資料そのものと取り組むだけではなく，研究のための正当な諸方法を作り出すための仕事である。

どの時代のどの言語も，それ自身の独自の語彙体系を持っている。それらの体系が一緒に比較されるなら，それらの体系それぞれの特色が非常にはっきりと現われる；この際，親近関係にあ

る諸言語を比較することは特に興味を呼ぶ。なぜなら，語彙的資料が大きく一致している場合には，個別的な語彙体系の構造の個別的な特徴点が，とりわけ明らかに際立ってくるからである。この事柄において，スラヴ諸語は，研究のために非常に適切でありがたい分野を提供している。

〈おわりに〉

プラハ言語学サークルは，1925年3月15日，プラハのカレル大学の教授であったV. Mathesiusが，3人の学者，B. Trnka，S. Karcevskij，R. Jakobsonを自宅に招いて開いた会合を出発点とする。ただし，公式には1926年10月6日の会合で，以後今日まで数多くの学者が参加して，注目すべき成果をあげている。

国内の機関誌としては，1935年創刊の*Slovo a slovesnost*（言葉と文学）があり，国際誌としては*Travaux du Cercle Linguistique de Prague*（*TCLP*）1～8（1936～38）；*Travaux Linguistique de Prague*（*TLP*）1～4（1964～71）；*Travaux du Cercle Linguistique de Prague n.s.*（英名 *Prague Linguistic Circle Papers*）1～3（1995～99）の3シリーズがある。各シリーズが各時代の重要テーマを扱っており，貴重である。

この3シリーズの中間にある2回の発行停止は，それぞれ政治的に不幸な事件によるものである。すなわち，第1回はナチスドイツのチェコ侵攻後の弾圧の結果である。ユダヤ人であるJakobsonは，それ以前にアメリカに脱出したが，ナチスのユダヤ人狩りはきびしく，たとえばサークルの創設者のMathesiusさえも，1940年には自分がユダヤ人でないという証言を提出せざるを得なかった。（J. Toman(ed.)*Letters and Other Materials from the Moscow and Prague Linguistic Circles, 1912—1945* Michigan Slavic Publications 1994 p.219参照）ナチスの保護領となったチェコでは，高等教育機関の活動は停止され，研究活動は極度に制限された。やがて45年，ソ連の赤軍の手によって“解放”され，活動を再開し*TLP*も発刊できたものの，68年の「プラハの春」の不発以降特に強化された社会主義政治勢力の意向に添わず，2回目の中断を余儀なくされた。

結局20年近く経った89年の「ビロード革命」の後，ようやく活動が活潑化し，カレル大学に設けられたMathesiusセンターで，サークルの定期的会合が可能になった。そして，96年3月には，サークル設立70周年およびJakobson生誕100年を記念して，カレル大学主催の国際会議が開かれている。これには世界各国から140人ほどの研究者（日本からは筆者を含めて4名）が参加し，各部門にわかれて発表を行った。この会議に関連する多数の論文が，*TCLP n. s.* 3（1999）に採録され，最新の研究成果を示している。特に巻頭の故O. Leška教授の‘Prague School Linguistics : Unity in Diversity’（p. 3～14）は，この学派の発展を簡明に伝えており，非常に参考になる。

その他，この学派の歴史を包括的に記した最近の著作として，J.Toman. *The Magic of a Common Language. Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle*. The MIT Press 1995；個人的回想ではあるがサークルの内情に触れたものとしてJ. Vachek. *Vzpomínky českého anglisty*（チェコの英学者の回想）. H&H, 1995がある。

発足以来すでに70年以上の伝統あるこの学派は，いわば第2世代のVachek教授（†1996），第3世代の代表的存在のLeška教授（†1997），J. Firbas教授（†2000）を相次いで失ったが，今後もさらに発展し続けるであろう。ついでながら，現在の日本でも，この学派ゆかりのJ. Neustupný教授，K. Fiala教授が，日本語を中心とした研究活動を精力的に展開している。（Neustupný教授には『外国人とのコミュニケーション』岩波新書 1982；Fiala教授には『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房 2000，という日本語の著作がある）

このサークル，さらに学派の基本的な主張は「機能主義」というキーワードによって解明されることが多いが，その出発点は，やはり1929年のテーゼに示されるであろう。今回その全訳による検討を終えて，まさにその感が深い。

〔注〕

(1)原語 *staroslovenština*.「古(代)教会スラヴ語」という訳語の方が通用度が高いかもしれない。

(2) 9世紀にスラヴ人にキリスト教を伝えたギリシアの伝道師兄弟。（KyrilとMethodius。特に前者は，いわゆるキリル文字の発明者と伝えられて有名）

(3)この用語については飯島（1988）参照。

(4)紀元前5～3世紀に地中海東部諸国で用いられた標準ギリシア語。一般には「(比較的広範囲の）共通標準語」の意味。

(5)原語 *redakce*. 仏訳 *rédactions*；英訳 *varieties*. 英訳形については“…the corresponding form is unknown in the given sense in English”というVachek（1983）p. 120の注がある。なお，原語の英訳形は，一般に*edition*又は*version*である。

(6)いわゆるキリル文字およびグラゴル文字。チェコ語形ではcyrilice（又はky−）およびhlaholice。

(7)原語 *střední církevně slovanský jazyk*.

(8)原語 *vrstva*. 仏訳 *éléments*（ただし後には*couche*）；英訳 *layer*.

(9)原語 *transkripce fonetická a fonologická*. *fonetika*（音声学）と*fonologie*（音韻論）の区別は，プラハ言語学派にとって重要な問題である。

(10)原語 *jevů jazykových*（2格形）. 仏訳 *faits de langue*；英訳 *linguistic facts*；独訳 *Spracherscheinungen*.　原語の意味に最も近いのは独訳形であろう。

(11)“口蓋音化”にほぼ等しいが，スラヴ諸語における子音の硬音（非口蓋音）と軟音の対立は

重要である。なお，*ï* は中舌寄りの母音。

⑿日本語の「音素」という用語は「音韻」に比べて新しく，術語的意味で正確度が高いと思われる。

⒀原語 *izoliniemi*（複数 7 格）．仏訳 *isolignes*；英訳 *isograms*.

⒁シュマヴァ（Šumava）チェコ最西部でドイツとの国境の深い森。独名 Böhmerwald.

⒂F.Miklosich *Lexicon palaeoslovenico-graecolatinum*. Wien 1862—1865

⒃E.Berneker *Slavisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg 1908—1914

⒄原語 *izolexém*. 仏訳 *isolexèmes*；英訳 *lexemic isograms*.

⒅原語 *poradní výbor akademií*. 仏訳 *comité des délégués des académies*；英訳 *advisory committee*.

⒆原語 *v lexikálním vědomí*. 仏訳 *dans la conscience lexicale*. 英訳および独訳ではこの部分が欠けている。

参考文献

Brun,L.1929. 仏訳. "Thèse présentées au Premier Congrès des philologues slaves" *TCLP* I. pp. 33-58

Československá Academie věd. 1986. *Mluvnice češtiny*. I. Praha, Academia

飯島　周. 1987.「プラハ言語学サークルの第10テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第20号。

飯島　周. 1988.「プラハ言語学サークルの第 3 テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第21号。

飯島　周. 1993.「プラハ言語学サークルの第 1，第 2 テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第26号。

飯島　周. 2000.「プラハ言語学サークルの第 9 テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第33号。

Scharnhorst, J. 1976. 独訳. "Thesen des Prager Linguistenkreis zum I. Internationalen Slawistenkongreß." Scharnhorst & Ising 1976. pp. 43-73.

Scharnhorst & Ising(ed.) 1976. *Grundlagen der Sprachkultur Beiträge der Prager Linguistik zur Sprachtheorie und Sprachpflege*. Berlin. Akademie-Verlag.

Vachek,J.(ed.) 1970a. "Tese předložené Prvému sjezdu slovanských filologů v Praze" Vachek 1970b.pp.35-65.

Vachek,J.(ed.) 1970b.*U Základů pražské jazykovědné školy*. Praha. Academia.

Vachek, J.(ed.) 1983a. *Praguiana Some Basic and Less Known Aspects of the Prague Linguistic School*. Amsterdam & Philadelphia. John Benjamin Publishing Company.

Vachek,J.(ed.) 1983b. 英訳. "Theses presented to the First Congress of Slavists held in Prague in 1929" Vachek 1983a, pp. 77-120.